

研究ノート

瀬戸窯業試験場所蔵デザイン研究試作品(昭和期)について

長谷川恵子*1、朝野陽子*1

The Design Research Prototypes of the Showa Period Accumulated at Seto Ceramics Research Institute

Keiko HASEGAWA*1 and Youko ASANO*1

Seto Ceramic Research Institute*1

瀬戸窯業試験場所蔵するデザイン研究試作品を産地陶磁器業界が利活用しやすい形に整理して公開、運用するために、試作品情報、画像、研究報告書、実物を連携させるデジタルアーカイブを構築することとし、アーカイブの素材となる台帳の作成に着手した。これまでに開所から昭和 63 年度までの昭和期の試作品 32 テーマ分 548 点のデータと画像を台帳に整理し、それらのデータから昭和期のデザイン試作品の傾向と特徴を整理、分析し、試作テーマや内容の推移を考察した。

1. はじめに

瀬戸窯業試験場所は昭和 46 年に愛知県瀬戸窯業技術センターとして設置され、令和 3 年 2 月に開所 50 年を迎えた。それまでに実施したデザイン・製品開発関連の試作研究は 97 テーマを数え、試作品数は研究報告書掲載分だけで 1500 点以上に上る。

これらの試作品は、産地、生活者、市場のニーズや課題に対応するテーマに基づいて企画・デザインされ、産地の素材、製造技術によって製作されたものであり、①研究報告書から、試作年度・テーマ、開発の背景、コンセプト、素材、技術等の詳細が明確、②今日に通用するテーマ、製品デザイン、アイデアが多数ある、③製品開発やデザインの参考資料やデザイン研究成果の展示資料として利活用できる、などの特徴がある。

そこで、これらの研究試作品を現代の産地のモノづくりや製品デザインに役立てるため、試作品実物と、写真画像、詳細情報、研究報告書等を一括管理する試作品デジタルアーカイブを構築することとし、基礎データの作成に着手した。これまでに開所から昭和 63 年度までの昭和期の試作品の画像と情報を台帳に整理した。

2. 研究方法

2.1 試作品デジタルアーカイブ構成検討

構築するアーカイブの内容、構成と付与機能、作成手順を検討した。アーカイブの構成イメージを図 1 に示す。

2.2 試作品台帳作成

研究報告と試作品を照合し、詳細情報と作品画像とをあわせてアーカイブの素材となる台帳(図2)を作成した。

試作品数が膨大であるため、製品名やセットごとにまとめて記載した。整理項目は、製作年度、研究テーマ、担当者、製品名、アイテム、試作情報(材質、焼成条件)、保管場所、研究報告書掲載箇所の他、展示会出品・受賞歴等の関連情報も加えた。



図 1 デジタルアーカイブ構成イメージ

年度 元号	西暦	テーマ	研究員	作品画像	品名	アイテム	ジャンル	材質	試作データ	所蔵等
S.46	1971	不明	本多		陶器花器2点	花器	置物、装飾品	半磁器、半磁器釉	焼成成形 ガス炉1200℃、OF下焼成(スクリュー、ゴム抜き、手描き)	第8回試験所蔵目録
S.47	1972	未利用資源による飲食器のデザイン研究	飯村、本多、荒木、榎原		モニングセット	ミルクカプ、プレート、ボウル	表地、食器	せっ器(ステンウェア)、水野粘土等、白マット・青不透明釉、釉貼	成形 皿 自動成形機、その他 鉢込成形 ガス炉1230℃OF.8h.	47年度研究報告書(47-5) P.69-77
S.47	1972	未利用資源による飲食器のデザイン研究	飯村、本多、荒木、榎原		ティーセット	カップ、ソーサー、ポット、クリーマー、ジュガー	表地、食器	せっ器(水野粘土、サハ等)、白マット・アマコ風青、茶色透明釉	成形 皿 自動成形機、その他 鉢込成形 ガス炉1230℃OF.8h.	47年度研究報告書(47-5) P.69-77
S.48	1973	水野粘土の焼込性について	飯村、荒木、榎原、本多		キャンドルスタンド・杵型	キャンドルスタンド	表地、文具、桌上アクセサリ	せっ器(水野粘土等)	焼成成形 ガス炉1230℃OF.成形 皿 鉢込成形	48年度研究報告書 P.53-65
S.49	1974	民謡の発色を中心としたデザイン研究	飯村、本多、荒木、榎原		食器セットB	急須、カップ、湯呑、カトラリー、スプーン	表地、食器	磁器、パイル陶釉	機械ぐる成形(急須、カトラリーは焼込)、ガス炉1300℃OF.民謡下絵乾草	49年度研究報告書 第4号 P.53-62

図 2 試作品台帳(部分)

*1 産業技術センター 瀬戸窯業試験場 製品試験室

3. 結果及び考察

3.1 台帳作成

これまでに昭和46年度から63年度までの昭和期の試作研究32テーマ分548点の試作について、製品名、セット単位で114件に取りまとめ、作品画像と詳細情報を台帳に入力した。

3.2 昭和期の研究試作品

台帳に整理した研究試作品の情報から、昭和期の試作数の推移、試作における食卓用・厨房用品などの食器類と、玩具・置物類や装飾品などのいわゆるノベルティ類の割合、研究テーマ、試作内容、実施状況等を把握し、この時期の試作の傾向、特徴を考察した。

3.2.1 試作数の推移と特徴

昭和期の試作数の推移(図3)を見ると、試作点数は概ね年毎に増加している。これは国内外の陶磁器市場の拡大に伴う産地業界組合の製品開発やデザインへのニーズ増大に連動していると考えられる。

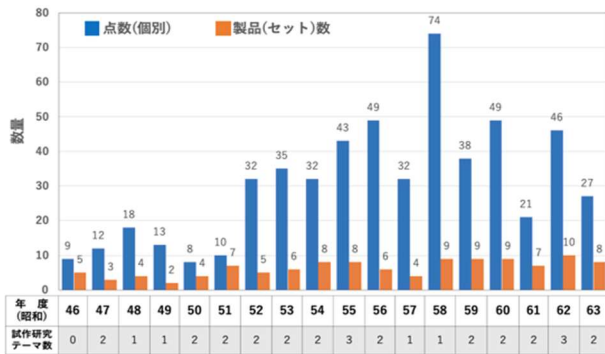


図3 試作数の推移

昭和48年からは、新規試作品が産地組合の新作展をはじめとする複数の展示会に出展され、昭和57年以降は産地組合との連携により試作研究を実施して、多数商品化している。昭和53年から60年にかけてはピース数の多い食器セットや製品シリーズによる試作提案が多数行われた。

試作の製品種類の構成比(図4)を見ると、ノベルティ・置物類が全体の約4割を占めており、輸出向けノベルティ製品をはじめ、置物、装飾品、土産物の製造が盛んな当時の瀬戸の陶磁器製造状況を反映した試作内容であることがわかる。

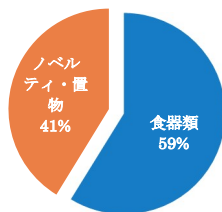


図4 構成比

3.2.2 試作テーマと内容の推移

昭和46年の開所から初期に実施された、「未利用資源の活用」や「産業廃棄物の活用」、「イングレイズ一度焼成技術」による製品試作は、当時危惧された陶磁器原料枯渇や、オイルショックを契機とした省エネなどの産業的な課題に対応した原料研究や技術開発に連動する「実用化試験」として実施された。

昭和49年度以降50年代後半にかけては、「呉須の発色」「イングレイズ加飾」「液体顔料による加飾」「上絵付を中心とした製品開発」等、加飾技法の高度化をテーマとして試作研究が実施され、提案性の高い食卓用品や食器セットが多数試作された。また、ノベルティ、置物等の分野に対しては、輸出ノベルティのデザインと品質の向上を図るため、海外のセンスや生活習慣に適合するノベルティ製品のデザイン、試作を実施している。

次いで、昭和50年代後半以降は、経済成長を背景とした生活水準の大幅な向上、核家族化をはじめとしたライフスタイルの変化、市場の成熟と消費ニーズの多様化、商品の個性化等を反映し、素材研究や製造技術の開発に伴う試作から、製品企画やデザイン提案を中心とした製品開発研究へと移行している。昭和59年度、60年度には、アパレルファッションと連動した商品企画やギフト向け商品などにより産地の個性が薄れた瀬戸の陶磁器デザインに対し、「産地の伝統的素材や技術の活用」による他産地製品との差別化、付加価値向上を提案し、鉄釉や御深井釉などの伝統釉や象嵌などの手工芸的な加飾法を効果的に活用したテーブルウェアを試作している。バブル期に入る昭和61年度から63年度には、消費者ニーズの多様化、個性化の進行や「量から質」「ものから心」への価値意識の変化に対応する新たなデザイン手法として「異種素材の活用」を取り上げ、陶磁器製品のパーツ等に金属や木材、繊維素材を組合せたユニークな飲食物、インテリア製品を提案した。そこで試作した金属製の取手が着脱できるカップや木製リムの食器、木材や金属を組み合わせたテーブルベル、陶磁器素材にニットやファブリックの素材感を付与した照明等は、いずれもデザイン性、機能性に「意外性や遊び心」を加えた独創的製品であり、時代に適合する製品デザインとして産地業界の関心を集め、多数製品化された。

4. 結び

瀬戸窯業試験場が所蔵するデザイン研究試作品の有効活用に向けて、昭和期の試作品の台帳整理を行なった。台帳のデータから試作状況を把握し、時代背景、産地、市場動向と合わせて分析し、試作研究のテーマ、内容の推移と特徴を考察した。